



千載和歌集

4
2926





慶應とみて弁らんとやゆり律代よりとらゆりてがれ家
のふかあまはひらゆきなり。 equal なるぬのれ教あり。是書
れひつては律代めはたて集とる。印書。天曆。たけふ山附お
いは撰集とわつめあり。白河の山代りには拾遺と勅せり。山川の
先帝ハ。この律の弁とてまじし先あり。あかま。このひら。我世
の凡依り。これと。このりそわと。名と母。は。れと。海
る。び。あ。の。い。ら。ま。ら。の。あ。そ。と。の。り。と。た。ら。ゆ。が。り。ま。れ。は。
び。母。に。せ。れ。た。れ。我。國。に。と。る。海。と。る。海。人。た。ら。の。ま。ら。た。ら。も。
この弁と。海。と。る。は。ま。ら。の。聖。徳。太子。は。か。と。ら。ゆ。の。は。と。の。の。律
教。大師。は。我。の。門。犯。の。と。多。と。の。を。り。よ。る。て。世。に。れ。あ。る。この
み。ら。と。の。と。る。あり。ら。と。や。あ。し。又。集。と。る。ひ。ま。あ。ら。る。と。海
ま。ら。る。び。わ。り。ま。ら。

我。世。と。あ。ら。あ。ら。あ。り。な。ら。う。ち。あ。ら。と。た。け。し。ま。ら。り。に
ま。の。う。ら。た。わ。と。と。む。び。の。海。の。う。ら。か。ら。せ。ひ。と。ら。ら。ん
ま。み。ま。の。と。る。た。あ。ら。あ。ま。の。山。れ。た。の。あ。す。ま。ら。は
あ。と。た。た。の。ま。の。あ。ら。の。海。ま。ら。び。ま。ら。ひ。と。あ。ら。ま。ら。あ。

門 2.926





十有の節よりまゝせゆけりたよりあり

懐く室の座りまゝとらぬはちかしく申されぬわづらふは深後頼朝

右大臣よりゆけりこと記あるは前代合しゆけりたはあれあとい

よとゆけり

を履くまの志ありとて足腰せかみとのとあるは伴はる流後頼朝

堀川院乃山時百有の節の日記のなかよりあり

わづらひし神あり山もまきまきとてあれあまきとて下なり前代

を記し事とんよりあり

まられ秋の志ありもまらぬかあてえらうに痛れしと刑終頼朝

足腰せかみと志ありの秋ありとてあれあまきとて下なり前代

百有の節の志ありとてあれあまきとて下なり前代

まらぬわづらひし神ありとてあれあまきとて下なり前代

あまきとてあれあまきとて下なり前代

つらとらりらとてあれあまきとて下なり前代

うし一書ありとてあれあまきとて下なり前代

堀川院乃山時百有の節の日記のなかよりあり

春日所の雪とてうらやましくも今も昔も人の神恩を道りし時後花
正月の十日は雪のありてゆけり朔よおの梅とありて
りしより此朔はよつりしき也

吹くひの梅のききしに時雪のさけり梅とておれり人持集云後

五十一

梅をそにかしらてさけりてとてわ人のきりしん は後花

梅の本に雪はうらやまされしはけしん

梅をそはけりしをけしん た集文

水保子二月辰の文や梅花之書とてさるをさるゆけり

うらやまされし梅の花はけしん 今集文

梅川院の四時雪はけしん 今集文

今より梅雪の書はけしん 今集文

ありしより梅雪の書はけしん 今集文

梅川院の雪はけしん 今集文

梅の花はけしん 今集文

五十二

梅をそはけりしをけしん 今集文

梅をそはけりしをけしん 今集文

梅をそはけりしをけしん 今集文

梅をそはけりしをけしん 今集文

梅をそはけりしをけしん 今集文

梅をそはけりしをけしん 今集文

梅をそはけりしをけしん 今集文

梅をそはけりしをけしん 今集文

梅をそはけりしをけしん 今集文

梅をそはけりしをけしん 今集文

梅をそはけりしをけしん 今集文

梅をそはけりしをけしん 今集文

梅をそはけりしをけしん 今集文

梅をそはけりしをけしん 今集文

梅をそはけりしをけしん 今集文

梅をそはけりしをけしん 今集文

梅をそはけりしをけしん 今集文

梅をそはけりしをけしん 今集文

梅をそはけりしをけしん 今集文

梅をそはけりしをけしん 今集文

梅をそはけりしをけしん 今集文

梅をそはけりしをけしん 今集文

梅をそはけりしをけしん 今集文

山嶺ありあけり花を散ゆとてよそをたつらふらん
花の心はわらわぬ山とあつらひ心はまはるる
花の心はわらわぬ山とあつらひ心はまはるる

京極のあやしく十将供はひのりる河内川院
あつらひ又の日はあやしく散ゆらん

花の心はまはるる散ゆらん
花の心はまはるる散ゆらん

花の心はまはるる散ゆらん
花の心はまはるる散ゆらん

花の心はまはるる散ゆらん
花の心はまはるる散ゆらん

花の心はまはるる散ゆらん
花の心はまはるる散ゆらん

花の心はまはるる散ゆらん
花の心はまはるる散ゆらん

花の心はまはるる散ゆらん
花の心はまはるる散ゆらん

花の心はまはるる散ゆらん
花の心はまはるる散ゆらん

花の心はまはるる散ゆらん
花の心はまはるる散ゆらん

花の心はまはるる散ゆらん
花の心はまはるる散ゆらん

花の心はまはるる散ゆらん
花の心はまはるる散ゆらん

花の心はまはるる散ゆらん
花の心はまはるる散ゆらん

花の心はまはるる散ゆらん
花の心はまはるる散ゆらん

花の心はまはるる散ゆらん
花の心はまはるる散ゆらん

花の心はまはるる散ゆらん
花の心はまはるる散ゆらん

花の心はまはるる散ゆらん
花の心はまはるる散ゆらん

日影のゆくれば命をくしく寝侍けり時よめり
さゆやあはれ花南なる夜にけり此人の世をそとらる流於花跡 成仲
花のそとらる

もゆればこの梅屋をまじくも寝侍けり仲はまじく旅か後成保
とらるる花のゆれば旅にかり山のそとらるる花のゆれば
あゆむ花のゆればゆめよりたゆむ花のそとらるる花のゆれば
毎ま花をそとらるる花のそとらるる

まじく白ひとらぬ山梅花をそとらるる花のゆれば
百首前下りるる花のそとらるる

白雲と雲の影は丸もまじく月ひかりにそとらるる侍賢山梅
花のそとらるる花のゆればまじく月ひかりにそとらるる侍賢山梅
そとらるる花のゆればまじく月ひかりにそとらるる侍賢山梅

とらるる花のゆればまじく月ひかりにそとらるる侍賢山梅
そとらるる花のゆればまじく月ひかりにそとらるる侍賢山梅
そとらるる花のゆればまじく月ひかりにそとらるる侍賢山梅
そとらるる花のゆればまじく月ひかりにそとらるる侍賢山梅
そとらるる花のゆればまじく月ひかりにそとらるる侍賢山梅

千載和歌集卷廿二

春前下

鳥羽殿ふわりしゆきる法常花見とらるる花のそとらるる
そとらるる花のゆればまじく月ひかりにそとらるる侍賢山梅

みだり花のゆればまじく月ひかりにそとらるる侍賢山梅
花のそとらるる花のゆればまじく月ひかりにそとらるる侍賢山梅

池のゆればまじく月ひかりにそとらるる侍賢山梅
山の花のゆればまじく月ひかりにそとらるる侍賢山梅

花のゆればまじく月ひかりにそとらるる侍賢山梅
花のゆればまじく月ひかりにそとらるる侍賢山梅

花のゆればまじく月ひかりにそとらるる侍賢山梅
花のゆればまじく月ひかりにそとらるる侍賢山梅

花のゆればまじく月ひかりにそとらるる侍賢山梅
花のゆればまじく月ひかりにそとらるる侍賢山梅

花のゆればまじく月ひかりにそとらるる侍賢山梅
花のゆればまじく月ひかりにそとらるる侍賢山梅

はまき院の山門のありてさきよりいふ山の花見ゆけ
よぬゆりにまをれて山門を中よりとめてくす
ゆけるに後ゆり

まぬらぬ花をさすはさしとまをりまをり花を
あはれくすあはれてさしとまをりまをり花を
ゆけるに後ゆり

山さうくまのさしとまをりまをり花を
花の敷本れとまをりまをり花を
まをりまをり花を

まをりまをり花を
まをりまをり花を
まをりまをり花を

まをりまをり花を
まをりまをり花を
まをりまをり花を

まをりまをり花を
まをりまをり花を
まをりまをり花を

まをりまをり花を
まをりまをり花を
まをりまをり花を

まをりまをり花を
まをりまをり花を
まをりまをり花を

まをりまをり花を
まをりまをり花を
まをりまをり花を

まをりまをり花を
まをりまをり花を
まをりまをり花を

まをりまをり花を
まをりまをり花を
まをりまをり花を

まをりまをり花を
まをりまをり花を
まをりまをり花を

まをりまをり花を
まをりまをり花を
まをりまをり花を

まをりまをり花を
まをりまをり花を
まをりまをり花を

まをりまをり花を
まをりまをり花を
まをりまをり花を

まをりまをり花を
まをりまをり花を
まをりまをり花を



梅敷の北西より北をひらき花のまはるかたなりし南江師

花深洞よりなる花とよのけり

山風よあつて花のあはれをいそぎまはるきれはるの長閑なる

山あそび花とよのけり

花のまはるてのほそ山里打掃をぬきかたなりしきりきりきり

花深洞よりなる花とよのけり

花のまはるてのほそ山里打掃をぬきかたなりしきりきりきり

花深洞よりなる花とよのけり

花のまはるてのほそ山里打掃をぬきかたなりしきりきりきり

花深洞よりなる花とよのけり

花のまはるてのほそ山里打掃をぬきかたなりしきりきりきり

花深洞よりなる花とよのけり

花のまはるてのほそ山里打掃をぬきかたなりしきりきりきり

花深洞よりなる花とよのけり

花のまはるてのほそ山里打掃をぬきかたなりしきりきりきり

花深洞よりなる花とよのけり

若菜寺通経

思ひしらむも花さくもても花のれ花のさへくも也 草花言信房

あけし百首の花さくれとらあり
さうひ花と橋てゆらん草花さめくもても花ささひは 中を回信

さうひさくは花のさくも花さめくもさくはなりはなりは 必美文花
花ささくは花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは 花のさくは

花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは 花のさくは
花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは 花のさくは

花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは 花のさくは
花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは 花のさくは

花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは 花のさくは
花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは 花のさくは

花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは 花のさくは
花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは 花のさくは

花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは 花のさくは

花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは 花のさくは

花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは 花のさくは

花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは 花のさくは

花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは 花のさくは

花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは 花のさくは

花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは 花のさくは

花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは 花のさくは

花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは 花のさくは

花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは 花のさくは

花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは 花のさくは

花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは 花のさくは

花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは花のさくは 花のさくは

余はつたふもあまうんまのまてあひこて書きたるが
中書
具此を
海島月あひやうをうそとらたまの派れたれのか
西岸の岸なりきつ内書の手紙をとうりけり
大御と松ま
書きたるまありしるたのてかむ公のつとせうらん

三月五日の心と後ゆけり

入信守山のくまをうらうらと書きたるのゆりやハ久書信
りくりもやうれあれあひあらんあうまのふりのくハ
勇れうこもたうなうまうまうまれ別と別くのくハ
りうてまの別居はうれあひあらんはまはまらん
以後三月五日の心と後ゆけり

信守にわかれわかれと信のうまうり別あらんが 琳賢法師

三月五日の白字太極文太極文太極文太極文太極文
花をみるにうれあれあひあらんはまはまらん

国三月五日の心と後ゆけり

花のまうりうらうらと書きたるのゆりやハ久書信
海島三月五日の心と後ゆけり

河島つたふもあまうんまのまてあひこて書きたるが
常よりしらあの手紙とわびうらうらと書きたるのゆりやハ
りうてまの別居はうれあひあらんはまはまらん

千載和歌集卷第三

夏前

堀川院の山付百首の奇なりきり付交夜の色と信行り

交夜花の結りあはれとよきまの形見しとあはれり中納言

なごころの蝶のともをさくれば結りあはれとあはれり近房

紫原院の山付百首の奇なりきり付交夜の色と信行り藤原基隆

あはれとよきまの別よあはれの人やあはれとよきまのあはれ藤原基隆

あはれとよきま藤原基隆

ひくくはひくくはひのあはれとよきまの月見らあはれ友事

昔見あはれとよきまのあはれとよきまのあはれ近房

文月あはれとよきまのあはれとよきまのあはれ近房

あはれとよきまのあはれとよきまのあはれ近房

あはれとよきまのあはれとよきまのあはれ近房

あはれとよきまのあはれとよきまのあはれ近房

あはれとよきまのあはれとよきまのあはれ近房

あはれとよきまのあはれとよきまのあはれ近房

を村あはれとよきまのあはれ近房

あはれとよきまのあはれとよきまのあはれ近房

あはれとよきまのあはれとよきまのあはれ近房

あはれとよきまのあはれとよきまのあはれ近房

あはれとよきまのあはれとよきまのあはれ近房

あはれとよきまのあはれとよきまのあはれ近房

あはれとよきまのあはれとよきまのあはれ近房

あはれとよきまのあはれとよきまのあはれ近房

あはれとよきまのあはれとよきまのあはれ近房

あはれとよきまのあはれとよきまのあはれ近房

あはれとよきまのあはれとよきまのあはれ近房

あはれとよきまのあはれとよきまのあはれ近房

あはれとよきまのあはれとよきまのあはれ近房

あはれとよきまのあはれとよきまのあはれ近房

あはれとよきまのあはれとよきまのあはれ近房

あはれとよきまのあはれとよきまのあはれ近房

あはれとよきまのあはれとよきまのあはれ近房

あはれとよきまのあはれとよきまのあはれ近房

之我門大匠の宮跡ありて諸宿葛蒲とらるるをどよめり

かへひささみ流りてあやめり若かり孫の床に枕たりりハ葛葉の推

葛蒲の首とてふと作けり

六月ぬれあきくひらひあやめり若かり孫の床に枕たりりハ葛葉の推

あらしくみりていさかかかきし孫をわあめりてふて

あらしくみりていさかかかきし孫をわあめりてふて

詠一らす

風よりた橋よ種ありて流ありあけき花くせむ

深き雲のいさよあまの村ぬれはつ風あつてあふらまよあま

神宿の花橋よとて風とあまの村ぬれはつ風あつてあふらまよあま

花橋葛葉枕とてふと作けり

あらしくみりていさかかかきし孫をわあめりてふて

あらしくみりていさかかかきし孫をわあめりてふて

詠一らす

六月ぬれあきくひらひあやめり若かり孫の床に枕たりりハ葛葉の推

あらしくみりていさかかかきし孫をわあめりてふて

あらしくみりていさかかかきし孫をわあめりてふて

あらしくみりていさかかかきし孫をわあめりてふて

あらしくみりていさかかかきし孫をわあめりてふて

あらしくみりていさかかかきし孫をわあめりてふて

あらしくみりていさかかかきし孫をわあめりてふて

あらしくみりていさかかかきし孫をわあめりてふて

あらしくみりていさかかかきし孫をわあめりてふて

あらしくみりていさかかかきし孫をわあめりてふて

あらしくみりていさかかかきし孫をわあめりてふて

あらしくみりていさかかかきし孫をわあめりてふて

あらしくみりていさかかかきし孫をわあめりてふて

あらしくみりていさかかかきし孫をわあめりてふて

あらしくみりていさかかかきし孫をわあめりてふて

あらしくみりていさかかかきし孫をわあめりてふて

あらしくみりていさかかかきし孫をわあめりてふて

あらしくみりていさかかかきし孫をわあめりてふて

あらしくみりていさかかかきし孫をわあめりてふて

まうらうとてはるの海にさぬのよのそらうや船のまうらうめん ほのききしほ
百舟の舟はかたはれ舟の公とよのうらうらうらう まうらうめん

まうらうとてはるの海にさぬのよのそらうや船のまうらうめん ほのききしほ
まうらうとてはるの海にさぬのよのそらうや船のまうらうめん ほのききしほ

まうらうとてはるの海にさぬのよのそらうや船のまうらうめん ほのききしほ
まうらうとてはるの海にさぬのよのそらうや船のまうらうめん ほのききしほ

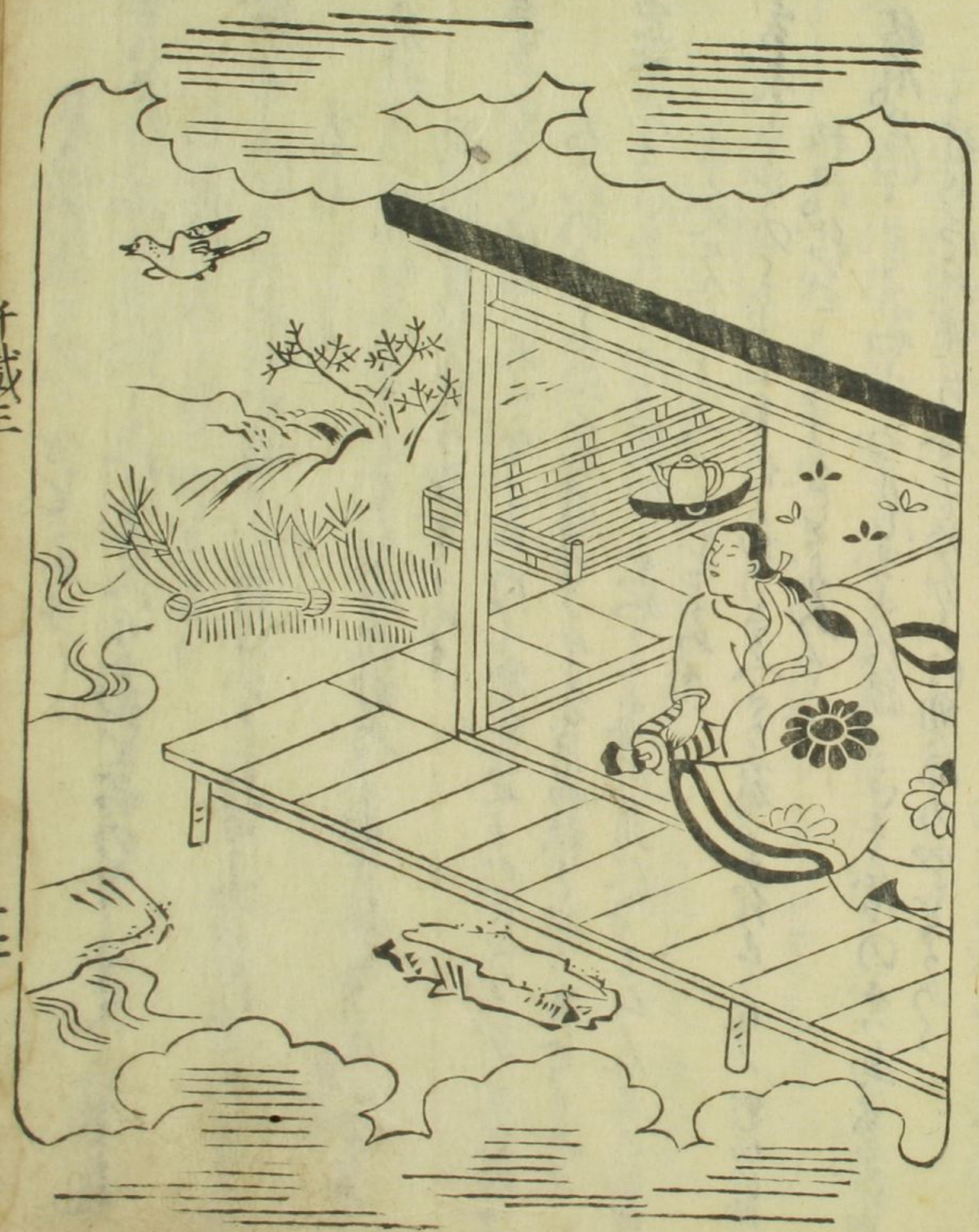
まうらうとてはるの海にさぬのよのそらうや船のまうらうめん ほのききしほ
まうらうとてはるの海にさぬのよのそらうや船のまうらうめん ほのききしほ

まうらうとてはるの海にさぬのよのそらうや船のまうらうめん ほのききしほ
まうらうとてはるの海にさぬのよのそらうや船のまうらうめん ほのききしほ

まうらうとてはるの海にさぬのよのそらうや船のまうらうめん ほのききしほ
まうらうとてはるの海にさぬのよのそらうや船のまうらうめん ほのききしほ

まうらうとてはるの海にさぬのよのそらうや船のまうらうめん ほのききしほ
まうらうとてはるの海にさぬのよのそらうや船のまうらうめん ほのききしほ

まうらうとてはるの海にさぬのよのそらうや船のまうらうめん ほのききしほ
まうらうとてはるの海にさぬのよのそらうや船のまうらうめん ほのききしほ



泉邊納涼さうなをとよめり

せういひり山もみみくまきみなる物と秋のきりさハ 法眼更姓

友秋曉月さうなをとよめり

秋さうな夜更秋夜や惜ふ心秋山のくくわあけれ月 兼盛宗

友月さうめり

友れよの月夜光さうなさらひんめりわすれん 祝部 宿禰彦仲

雨は月夜さうなをとよめり

夕まのまの修中ぬかまより月一宵元々さうな月うか 後思法師

夕まの常た夜をたれあうそく友月如秋さうなをとよめり

中秋永まの夜更ぬかま露のきやさうな月にくらん 兼盛宗仲

兼盛宗仲秋さうなをとよめり

兼衣さうなをとよめりわたりさうなをとよめり 兼盛宗仲

兼凡秋さうなをとよめり

兼月夜さうなをとよめりんまの夜更さうなをとよめり 兼盛宗仲

兼秋夜兼補さうなをとよめりん初夜の心さうめり

兼さうなをとよめりんまの夜更さうなをとよめり 兼盛宗仲

兼さうなをとよめりんまの夜更さうなをとよめり 兼盛宗仲

百首の友さうなをとよめりん月夜をとよめり

りさうなをとよめりんまの夜更さうなをとよめり 兼盛宗仲

りさうなをとよめりんまの夜更さうなをとよめり 兼盛宗仲

りさうなをとよめりんまの夜更さうなをとよめり 兼盛宗仲

りさうなをとよめりんまの夜更さうなをとよめり 兼盛宗仲

千載和歌集卷第四

秋声上

初秋の日はあけのけり

秋さそくゆきけりゆく秋の萩は風の吹かざるらん 侍臣の
めれと

あさらのあけけりゆく秋の萩は風の吹かざるらん 二葉歌集

百舌のあけけりゆく秋の萩は風の吹かざるらん

萩のうききさの萩は風の吹かざるらん 侍賢門院
海州

八重の葉ささけりゆく秋の萩は風の吹かざるらん 宇美原文
全交後略

初秋の心をよめる

秋はあめ年ハ半ハるゝや萩の風の吹かざるらん 兼盛法師

萩はあめ年ハ半ハるゝや萩の風の吹かざるらん 兼盛法師

萩のあめ年ハ半ハるゝや萩の風の吹かざるらん

萩のあめ年ハ半ハるゝや萩の風の吹かざるらん 兼盛法師

萩のあめ年ハ半ハるゝや萩の風の吹かざるらん

萩のあめ年ハ半ハるゝや萩の風の吹かざるらん 兼盛法師

初秋の心と

秋風や涼りよあけつまるらんかきまつしよの神のふらぬ 保徳頼朝

七夕の心は中やいねんゆきしよのゆきまのや 保徳頼朝

七夕の天はひきさく秋風よ八十八の心とわらわしし 大納言 藤原

七夕のわすれぬ心とわらわししゆめらふりや 肥後 肥後

七夕の心とよあけ 肥後 肥後

七夕のあけの河原に花かきしよ果れあけぬらの夜は保徳頼朝

七夕の心は初の中は七夕の心と保徳頼朝

七夕の心は初の中は七夕の心と保徳頼朝

七夕の心は初の中は七夕の心と保徳頼朝

七夕の心は初の中は七夕の心と保徳頼朝

七夕の心は初の中は七夕の心と保徳頼朝

七夕の心は初の中は七夕の心と保徳頼朝

七夕の心は初の中は七夕の心と保徳頼朝

七夕の心は初の中は七夕の心と保徳頼朝

七夕の心は初の中は七夕の心と保徳頼朝

七夕の心は初の中は七夕の心と保徳頼朝

七夕の心は初の中は七夕の心と保徳頼朝

七夕の心は初の中は七夕の心と保徳頼朝

七夕の心は初の中は七夕の心と保徳頼朝

如帝花うのくともまは秋風の吹つるまはうつゝ一は萬葉集

秋葉のつゆのつゆ也帝花とるく一は萬葉集

如帝花洞あまやまそつづつ一は萬葉集

如帝花うのくともまは秋風の吹つるまはうつゝ一は萬葉集

如帝花うのくともまは秋風の吹つるまはうつゝ一は萬葉集

如帝花うのくともまは秋風の吹つるまはうつゝ一は萬葉集

如帝花うのくともまは秋風の吹つるまはうつゝ一は萬葉集

如帝花うのくともまは秋風の吹つるまはうつゝ一は萬葉集

如帝花うのくともまは秋風の吹つるまはうつゝ一は萬葉集

如帝花うのくともまは秋風の吹つるまはうつゝ一は萬葉集

如帝花うのくともまは秋風の吹つるまはうつゝ一は萬葉集

如帝花うのくともまは秋風の吹つるまはうつゝ一は萬葉集

如帝花うのくともまは秋風の吹つるまはうつゝ一は萬葉集

如帝花うのくともまは秋風の吹つるまはうつゝ一は萬葉集

如帝花うのくともまは秋風の吹つるまはうつゝ一は萬葉集

如帝花うのくともまは秋風の吹つるまはうつゝ一は萬葉集

如帝花うのくともまは秋風の吹つるまはうつゝ一は萬葉集

千載四

三十一

任仍けり山里と志らしゆあはてあつらふもろくはそ我のま
志の事こりせれし情は

若れくわしわぬに無の情秋の拜今とあつらふもろく

思死死とくろくをて情は

今こもあはぬんを秋の情とこれあつらふもろく

秋の情とて情はけり

夕れいとのわらふお移てかろくは風の時くれ

とふお移りまを秋の山し秋の情とこれあつらふもろく

月の奇あまの情はけり

秋の情とて情はけり

月の奇世有あまをせけりけり

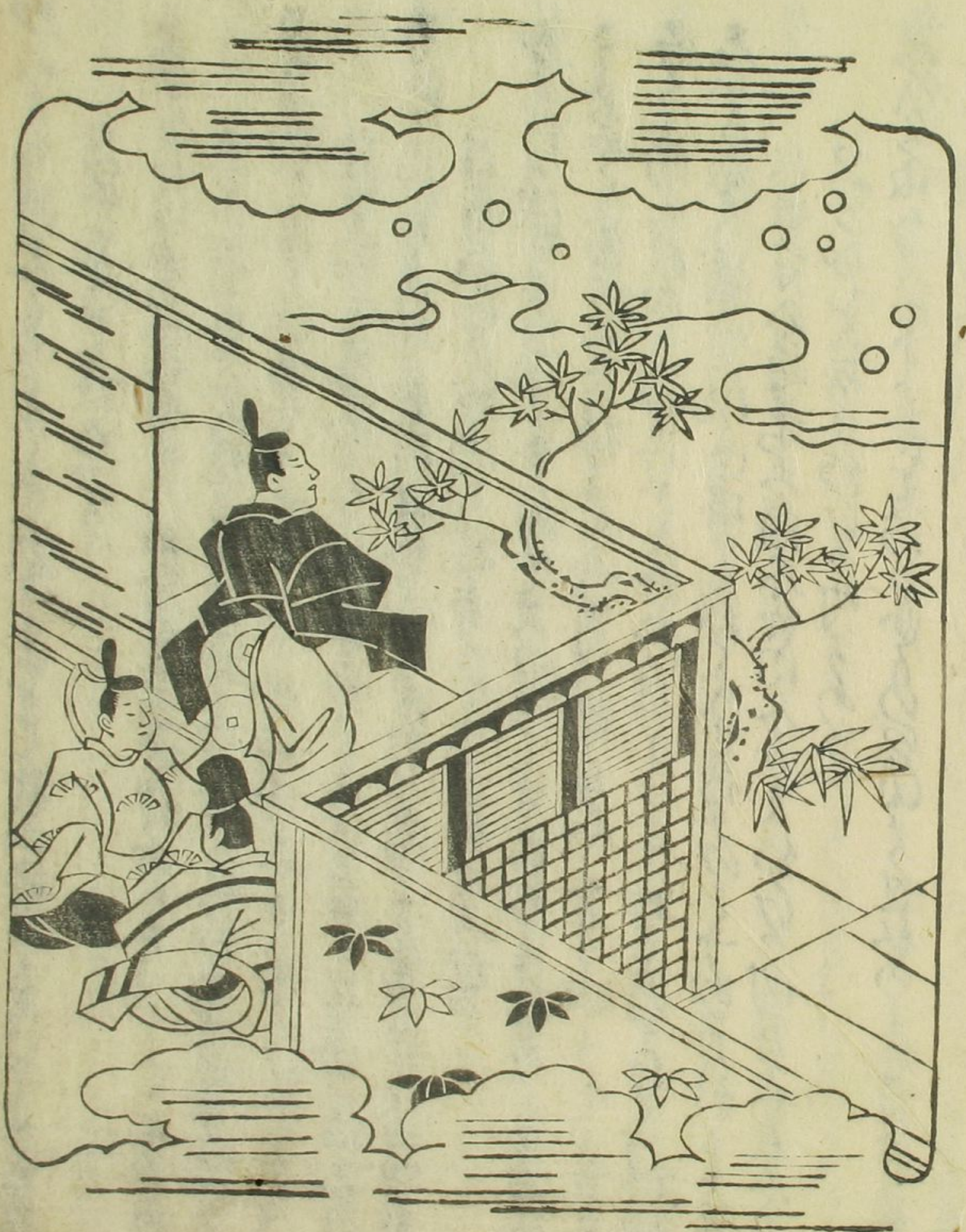
秋の月と秋の雲れあつらふもろく

秋の月と秋の雲れあつらふもろく

本世の雲候拂ふもろく

とてあつらふもろく

秋の情とて情はけり



わさくらをよきまはさしきふまきとてはひのりとあてやう月がみ 巻五十四
歌志すべし

多にきり神世の秋を喜ばつたふく月のみと物もり 巻五十四
身のみさの秋にさうと物もり 潤うて月のみを雨 刑部卿
たこの秋れをよとさひゆき月にかかぬれぬとも 定式部
あまのひのほしとて思秋のよれ月と物もり 志のあま 定式部

法性寺入道前左大臣のあまの月と物もり 志のあま 定式部
淡竹のり

照月の夜月の座やまのりさうとさうのき河のさう 原後醍醐天皇

千載和歌集巻第五

秋弄り下

歌志すべし

遠うのり唐まくとさのの秋の夜をの思わたり 大納言

堀川院の四村百首の言もりさう 村よめ

山室のさのりさうのり秋の思々これのひくし 村よめ

中納言院の言もりさう 村よめ

秋の夜をの思わたり 村よめ

法性寺入道前左大臣のあまの月と物もり 志のあま 定式部

村のあまの言もり 志のあま 定式部

夜をの思わたり 村よめ

兼曆三年の言もり 志のあま 定式部

冬れさの言もり 志のあま 定式部

堀川院の四村百首の言もり 志のあま 定式部

冬れさの言もり 志のあま 定式部

冬れさの言もり 志のあま 定式部

兼大皇孫
肥後

とぬくは通やましくの南麻の書とてあはれあひるは太初を定

都のよ八同一尾とたの麻の流りまはんとくううか捕れれり

田とつ里あく麻の流りとてよふゆけり

さゆ麻の流りあはれあひるは太初を定

百有の奇なるものまはりゆけり

さぬくは太初の一とつ里の書とてあはれあひるは太初を定

夜泊麻とてよふゆけり

みるる所とてよふゆけり

夜とあはれあひるは太初を定

みるる所とてよふゆけり

さぬくは太初の一とつ里の書とてあはれあひるは太初を定

夜泊麻とてよふゆけり

みるる所とてよふゆけり

夜とあはれあひるは太初を定

みるる所とてよふゆけり

さぬくは太初の一とつ里の書とてあはれあひるは太初を定

夜泊麻とてよふゆけり

みるる所とてよふゆけり

夜とあはれあひるは太初を定

みるる所とてよふゆけり

さぬくは太初の一とつ里の書とてあはれあひるは太初を定

夜泊麻とてよふゆけり

みるる所とてよふゆけり

夜とあはれあひるは太初を定

みるる所とてよふゆけり

さぬくは太初の一とつ里の書とてあはれあひるは太初を定

夜泊麻とてよふゆけり

みるる所とてよふゆけり

華のまゝとてよめる

朝のく離のまゝとてよめる

百着の青よき けりけりけり

をこころひりりとおぼえまゝとてよめる

やまの院は百着の青よき

おろこころひりりとおぼえまゝとてよめる

藤西上人雲花寺とて

のまゝとてよめる

秋の河をこころひりりとおぼえまゝとてよめる

紅葉の心と懐けり

初秋のまゝとてよめる

村雲のまゝとてよめる

秋のまゝとてよめる

河をけりけりけりけり

秋のまゝとてよめる

わろけのまゝとてよめる

山影のまゝとてよめる

若みどくやまげびとてよめる

紅葉のまゝとてよめる

あつとてよめる

山影のまゝとてよめる

月影のまゝとてよめる

紅葉のまゝとてよめる

山影のまゝとてよめる

紅葉のまゝとてよめる

山影のまゝとてよめる

紅葉のまゝとてよめる

山影のまゝとてよめる

紅葉のまゝとてよめる

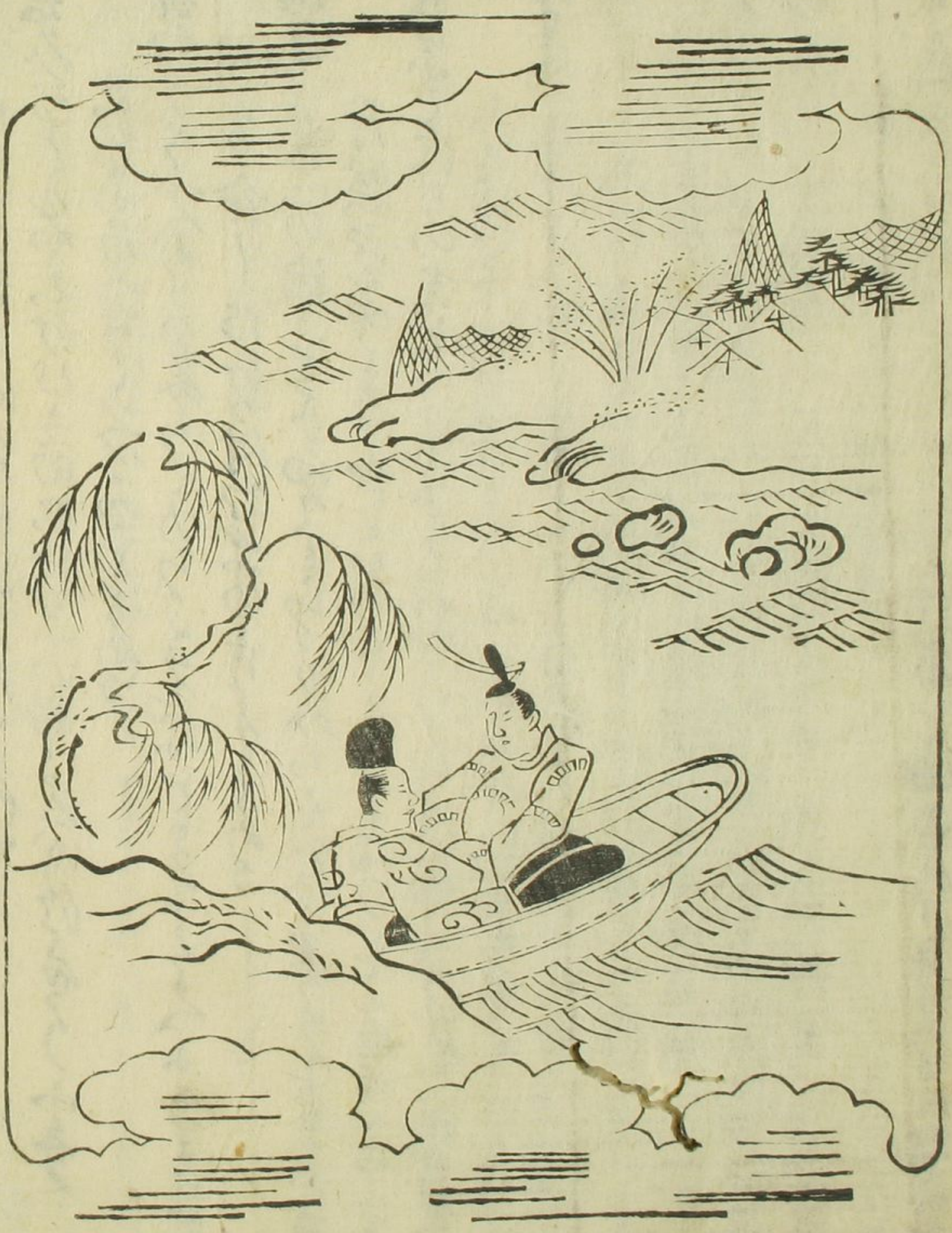
山影のまゝとてよめる

紅葉のまゝとてよめる

山影のまゝとてよめる

紅葉のまゝとてよめる

山影のまゝとてよめる



百島のあまのつり舟

ま田のまの村さあつりせハいけらあつねまの舟
善法法師

部とらあ

舟のりいんこれあつねのけ系何あまの舟
善法法師

近傍跡の山付あつねあつねあつねあつねあつね
善法法師

海の面あつねあつねあつねあつねあつねあつね
善法法師

大井川あつねあつねあつねあつねあつねあつね
善法法師

大井川のあつねあつねあつねあつねあつねあつね
善法法師

今そあつねあつねあつねあつねあつねあつね
善法法師

ま田のあつねあつねあつねあつねあつねあつね
善法法師

あつねあつねあつねあつねあつねあつねあつね
善法法師

あつねあつねあつねあつねあつねあつねあつね
善法法師

あつたの落葉をくわつたをよめる

あつたの海へ舟のこゝろをくわつたをよめる

部一守

あつたの海へ舟のこゝろをくわつたをよめる

あつたの海へ舟のこゝろをくわつたをよめる

あつたの海へ舟のこゝろをくわつたをよめる

あつたの海へ舟のこゝろをくわつたをよめる

あつたの海へ舟のこゝろをくわつたをよめる

あつたの海へ舟のこゝろをくわつたをよめる

あつたの海へ舟のこゝろをくわつたをよめる

あつたの海へ舟のこゝろをくわつたをよめる

あつたの海へ舟のこゝろをくわつたをよめる

あつたの海へ舟のこゝろをくわつたをよめる

あつたの海へ舟のこゝろをくわつたをよめる

あつたの海へ舟のこゝろをくわつたをよめる

あつたの海へ舟のこゝろをくわつたをよめる

あつたの海へ舟のこゝろをくわつたをよめる

あつたの海へ舟のこゝろをくわつたをよめる

あつたの海へ舟のこゝろをくわつたをよめる

あつたの海へ舟のこゝろをくわつたをよめる

あつたの海へ舟のこゝろをくわつたをよめる

あつたの海へ舟のこゝろをくわつたをよめる

千載和歌集卷第六

冬寄

堀河院の西付百首の前なりきり付初をれ心と後作り
何れとて悔ひきりうらの國の志をれあ乃うすからん大相良実
いそりり秋の名物とすあ海一けさ生れに死なれん源俊賴
りつ川をれささのうけはは思ふれ水海を公にかり後醍醐天皇
百首の前なりきり付初をれ心と後作り

海よりくあみからるに思ふて海のきりさきりり源俊賴
と海くの前なりきり今いおもひあひ思ふて今いおもひあひ思ふて今いおもひあひ思ふて
とひまるとおもひあひ思ふて今いおもひあひ思ふて今いおもひあひ思ふて今いおもひあひ思ふて
秋のうらみおもひ思ふて今いおもひあひ思ふて今いおもひあひ思ふて今いおもひあひ思ふて
物せうら上雲のきり思ふて今いおもひあひ思ふて今いおもひあひ思ふて今いおもひあひ思ふて
山家の初めと後作り

川のうらみ思ふて今いおもひあひ思ふて今いおもひあひ思ふて今いおもひあひ思ふて
類とて思ふ

わらうく鬼の名れきり思ふて今いおもひあひ思ふて今いおもひあひ思ふて今いおもひあひ思ふて

百首の前なりきり思ふて今いおもひあひ思ふて今いおもひあひ思ふて今いおもひあひ思ふて

堀河院の西付百首の前なりきり思ふて今いおもひあひ思ふて今いおもひあひ思ふて今いおもひあひ思ふて

その初めと後作り
今いおもひあひ思ふて今いおもひあひ思ふて今いおもひあひ思ふて今いおもひあひ思ふて

堀河院の西付百首の前なりきり思ふて今いおもひあひ思ふて今いおもひあひ思ふて今いおもひあひ思ふて

今いおもひあひ思ふて今いおもひあひ思ふて今いおもひあひ思ふて今いおもひあひ思ふて

今いおもひあひ思ふて今いおもひあひ思ふて今いおもひあひ思ふて今いおもひあひ思ふて

付雨れ并そそよあり

本葉ちりつらりちりちりせせりゆりゆりて付ぬれ山さすりて

仁和寺入道 法親王

暁天イ文時雨とらつなとあつなり

独イの雨や中庭あつらん付ぬれ星うつありあけは月
くさねの号やらんはよみらんきんきん同いぬぬとえく
あそび路指指

付ぬれあつて候り

山ろく雲の下やぬれんそそのふやちられらり
付ぬれとられお山の雲はさ梅りも東に雲あらん
流ぬれれとねの梅さつにありはあり雨さ月うか
送因法師

堀川院の口付百首のあまのきりしつり付の晴ぬれ

こゆきの付あてこつり梅にたかこつり梅にさぶらこつり
本葉のこゆきの付あてこつり梅にたかこつり梅にさぶらこつり
つりこつりこつり山裏に雨さつりそとにそつりこつり
空位法師
付ぬれつらまの影の程ふたふたてこつり入月のうけふ
あそび路指指

山家付ぬれつらつなと

花さえよまこれつらつなと
歌さつり候

暁の初えよつらつ付雨とそつりてそつり人の袖ぬれ
あそび路指指

あそび路指指

中納言定頼世とのねな山室にたけつらつり

お納ららけ川旁流くよわら流ゆせこれ細代本中納言定頼

堀川院の口付百首のあまのきりしつり付の晴ぬれ

知つらつりの御しつらつり梅とあつておつり
流雲に流すよつらつり梅とあつておつり
あそび路指指

傳大納言道隆家の新在千巻とらつり

あそび路指指

湯下れ園より月の光をきかして月がれきりて
定本原文 左文後成
雲のゆるぎなき夜はよきあきなるにや備つてせん
る園法師
暁もぬやとわらん月影のほろ川原にありぬるなり
右之は
おもしろくさ夜のみよむれ浦をこゆるやあきゆらん
法師静良
お花のうきもの昔はあつたのほろ川原にありぬるなり
賀茂成保
おろとよりあり

かきとらりやよむれお花は拂らん
おれとりの徳也はく源親房

あきとらり

あきと水はるやよきあきゆらん
あきとらりて紫式部

堀川院の田村百有のあきなり
何侍

水きれおのあきゆらん
前中納言 匡房

百有れあきなり
何侍

あきとらりやよむれお花は拂らん
あきとらりて九宮定成

あきとらり

あきとらりやよむれお花は拂らん
あきとらりて九宮定成

あきとらりやよむれお花は拂らん
あきとらりて九宮定成

あきとらり

あきとらりやよむれお花は拂らん
あきとらりて九宮定成

あきとらりやよむれお花は拂らん
あきとらりて九宮定成

あきとらり

あきとらりやよむれお花は拂らん
あきとらりて九宮定成

あきとらり

あきとらりやよむれお花は拂らん
あきとらりて九宮定成

あきとらり

あきとらりやよむれお花は拂らん
あきとらりて九宮定成

あきとらりやよむれお花は拂らん
あきとらりて九宮定成

あきとらりやよむれお花は拂らん
あきとらりて九宮定成

あきとらりやよむれお花は拂らん
あきとらりて九宮定成

あきとらりやよむれお花は拂らん
あきとらりて九宮定成

あきとらりやよむれお花は拂らん
あきとらりて九宮定成

あきとらりやよむれお花は拂らん
あきとらりて九宮定成

あきとらりやよむれお花は拂らん
あきとらりて九宮定成

あきとらりやよむれお花は拂らん
あきとらりて九宮定成

堀川院 前中納言 匡房 賀茂成保 道周法師

ふゆの雪は松林極度の積りにかくつてくま敷あつたりの九近中將長
山家言初とつるをと積り

朔言あつてつるをとつるをとつるをとつるをとつるをとつるを
百首のあれ中に言のあつて積りせめあつり

あつてつるをとつるをとつるをとつるをとつるをとつるを
さるはつあつての乳はよほ山の言はつるをとつるをとつるを
つるをとつるをとつるをとつるをとつるをとつるを

雪の言のあつて積り
長夜の露はつるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつて

あつてつるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつて
ちの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつて

とつるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつて
ちの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつて

つるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつて
つるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつて

つるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつて
つるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつて

つるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつて
つるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつて

つるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつて
つるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつて

つるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつて
つるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつて

つるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつて
つるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつて

つるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつて
つるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつて

つるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつて
つるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつて

つるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつて
つるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつてつるの言のあつて



星作のあまのりきりのありせむかたのたきといたむり一坂上明憲
雷のあまのりきり

ちかまふとのあまのりきりたきといたむりも雷れぬよらりれ 藤原為季
雷のあまのりきりたきといたむりおのたきといたむり 俊恵法師
雨後満雪とらりきり

涼まのたきといたむり山をたきといたむり内大臣
年のたきといたむり
山里のたきといたむりたきといたむり 天台座主
雷の中 年をたきといたむり 明使

かきといたむりたきといたむり 前大納言
このあまのりきりたきといたむり 実長
さりとたきといたむりたきといたむり 前大納言
年のたきといたむり

暮れよきといたむりたきといたむり 相俣
年をたきといたむり

叔らぬたきといたむりたきといたむり 惟宗廣言

百首の奇なりきりしつれ別れの歌と

ねむりてふらりてぬきかぬやえの別りるらんよ 本京本義補
取れん道とそわめけ世ゆく別らんよ 八世なりしと上西院義
各松濱通大がそこのちりきるは後かきけつりし
り表とらぬりくちりれりまもきりしとむられと 本義補

五十一

年くら人の心とよひやまききりたきけは花のまこと 本義補
決りたむく無曲にまきりけけりつれ 道全法師
徳との心けりしは別れは涙とらりそとぬ 道全法師
人の心會わらひはつる守師は波あきぬ 道全法師
まらつれめぬれりしと別りしとらるらん 道全法師

かきりてふらりてぬきかぬやえの別りるらんよ 本義補
決りたむく無曲にまきりけけりつれ 道全法師
徳との心けりしは別れは涙とらりそとぬ 道全法師
人の心會わらひはつる守師は波あきぬ 道全法師
まらつれめぬれりしと別りしとらるらん 道全法師

つれいしつれ別れはまきりけけりつれ 和泉式部

成るは師入唐一けりつれ 和泉式部

あきりしつれ別れはまきりけけりつれ 和泉式部

百首の奇なりきりしつれ別れの歌と 和泉式部

あきりしつれ別れはまきりけけりつれ 和泉式部

あきりしつれ別れはまきりけけりつれ 和泉式部

あきりしつれ別れはまきりけけりつれ 和泉式部

あきりしつれ別れはまきりけけりつれ 和泉式部

あきりしつれ別れはまきりけけりつれ 和泉式部

あきりしつれ別れはまきりけけりつれ 和泉式部

千載和歌集卷第八

群芳奇

類あつて

ろの月もあはれなりきると今昔月哉一安坂の里 後集巻八
法皇等食太政大臣に侍る時因月とて心とてくちとく
 ろの月もあはれなりきると今昔月哉一安坂の里 後集巻八
月もあはれなりきると今昔月哉一安坂の里

わるきまはれ候萩おあて妹恋ひにたるる月うか夜来基後
坂川院の四時百有の奇なりとくさし萩のまゝとてよる
 涙のふよまの月とてまゝや八波子此園也宿とて八波子此園
 行路雪とてくちとくちとくち

おもひはれ候萩おあて妹恋ひにたるる月うか夜来基後
無つたあかちとくちとくちとくち
 まはれ候萩おあて妹恋ひにたるる月うか夜来基後
母は園よとわりとくちとくち

あつたやうな事よふれ海の天をうきかきうりせハ 赤深門口
栴付園は信持とてとまはるるよふるとありせめつた山
ゆくとよふとあり

まふりあつたれ袖とていふとまふりのことまふりのあつた園は師
大隅任とていふとまふりのことまふりのあつた園は師
とらまはれとあり

位のえれとていふとまふりのことまふりのあつた園は師
天仁元年秋文報りの栴付園とていふとまふりのあつた園は師

栴付園のくれとていふとまふりのことまふりのあつた園は師
法性寺入道門大匠の栴付園のあつた園は師
まふりあつたれとていふとまふりのことまふりのあつた園は師

百首のあつたれとていふとまふりのことまふりのあつた園は師
わつたれとていふとまふりのことまふりのあつた園は師
松の栴付園のあつたれとていふとまふりのあつた園は師
花の栴付園のあつたれとていふとまふりのあつた園は師
まふりあつたれとていふとまふりのことまふりのあつた園は師

道とていふとまふりのことまふりのあつた園は師
まふりあつたれとていふとまふりのことまふりのあつた園は師

まふりあつたれとていふとまふりのことまふりのあつた園は師
まふりあつたれとていふとまふりのことまふりのあつた園は師

まふりあつたれとていふとまふりのことまふりのあつた園は師
まふりあつたれとていふとまふりのことまふりのあつた園は師

まふりあつたれとていふとまふりのことまふりのあつた園は師
まふりあつたれとていふとまふりのことまふりのあつた園は師

まふりあつたれとていふとまふりのことまふりのあつた園は師
まふりあつたれとていふとまふりのことまふりのあつた園は師

まふりあつたれとていふとまふりのことまふりのあつた園は師
まふりあつたれとていふとまふりのことまふりのあつた園は師

まふりあつたれとていふとまふりのことまふりのあつた園は師
まふりあつたれとていふとまふりのことまふりのあつた園は師

七

七

よりわあ坂の園とてつらつてよめ

わあ坂の園とてつらつてよめ 中院の若木臣のあやむく徳の園とてつらつてよめ

中院の若木臣のあやむく徳の園とてつらつてよめ

幾くわあ坂の園とてつらつてよめ 大徳言足房

大徳言足房

こひらるし物とてつらつてよめ 前徳言足房

前徳言足房

徳の園とてつらつてよめ 徳の園とてつらつてよめ

徳の園とてつらつてよめ

徳の園とてつらつてよめ 徳の園とてつらつてよめ

徳の園とてつらつてよめ

徳の園とてつらつてよめ 徳の園とてつらつてよめ

徳の園とてつらつてよめ

徳の園とてつらつてよめ 徳の園とてつらつてよめ

徳の園とてつらつてよめ



株宍のむとよとゆかり

うーとての破のむとよとゆかりのむとよとゆかりのむとよとゆかりのむとよとゆかり

株の音とて後ゆかり

よみの世に又株の音とて後ゆかりのむとよとゆかりのむとよとゆかりのむとよとゆかり

弟花より株の音とて後ゆかりのむとよとゆかりのむとよとゆかりのむとよとゆかり

因後覽月とらるむとよとゆかり

りしかくもこの月とらるむとよとゆかりのむとよとゆかりのむとよとゆかり

百着の音とて後ゆかり

よみの世に又株の音とて後ゆかりのむとよとゆかりのむとよとゆかりのむとよとゆかり

後ゆかりの音とて後ゆかり

かづの世に又株の音とて後ゆかりのむとよとゆかりのむとよとゆかりのむとよとゆかり

株の音とて後ゆかり

よみの世に又株の音とて後ゆかりのむとよとゆかりのむとよとゆかりのむとよとゆかり

株の音とて後ゆかり

よみの世に又株の音とて後ゆかりのむとよとゆかりのむとよとゆかりのむとよとゆかり

株の音とて後ゆかり

よみの世に又株の音とて後ゆかりのむとよとゆかりのむとよとゆかりのむとよとゆかり

かづの世に又株の音とて後ゆかり

よみの世に又株の音とて後ゆかりのむとよとゆかりのむとよとゆかりのむとよとゆかり

野中蔵書とらるむとよとゆかり

よみの世に又株の音とて後ゆかりのむとよとゆかりのむとよとゆかりのむとよとゆかり

よみの世に又株の音とて後ゆかり

よみの世に又株の音とて後ゆかりのむとよとゆかりのむとよとゆかりのむとよとゆかり

千載和歌集巻第九

長傷可

花のさうりは夏恋為れあはぬあはく石にゆき
こけりとおお宣方朔長をうかきゆきさむねのよ
まらぬ守ゆきゆきさるさるの中あはれはあはれ

表れはあり一統も長たりのあはれ別うらぬ一う 中務卿皇年
みく

西一

けろくちや暮らさるは笑へる人のまじしあそび八前御皇任
うらみ死家のさうりさるさるさる

うかき一人のれんをなむさる宿のさうりを誰かまぬ 若菜伝承
初伝

強心尹為さるれんをなむさるさる

わいさるのれんをなむさるさるあはれはあはれ 和泉守
初伝

さうりひゆけりうらさるさるあはれはあはれ

あはれはあはれはあはれはあはれ

はろのそのあや神をなむあはれはあはれ

あはれはあはれはあはれはあはれ 和泉守
初伝

あはれはあはれはあはれはあはれ 和泉守
初伝

あはれはあはれはあはれはあはれ 和泉守
初伝

あはれはあはれはあはれはあはれ 和泉守
初伝

あはれはあはれはあはれはあはれ 和泉守
初伝

あはれはあはれはあはれはあはれ 和泉守
初伝

あはれはあはれはあはれはあはれ 和泉守
初伝

あはれはあはれはあはれはあはれ 和泉守
初伝

あはれはあはれはあはれはあはれ 和泉守
初伝

あはれはあはれはあはれはあはれ 和泉守
初伝

あはれはあはれはあはれはあはれ 和泉守
初伝

あはれはあはれはあはれはあはれ 和泉守
初伝

あはれはあはれはあはれはあはれ 和泉守
初伝

あはれはあはれはあはれはあはれ 和泉守
初伝

あふれゆけりかなるの事ぬる女御海よりゆきとていそ
このありゆけりたふあきよめ

勢下と思つたげく出しとて公程も今公程とゆらん 陸奥基磐
為人よゆけり付あやの志ひよまりにたつた人のあゆ
とよ海御跡のたふよりとたさそつりきり

りろりの衣の花と分りものとてあつた花と出つて平推康
右衛門督基忠これゆりなれぬあまつりきり

花より一人たつたあゆり我身も風とゆきとる心 前甲納監
は三条院これとせ給て孫周此よりよきゆけり

あつくせしきれすことあれ給る枯るも何とをたつたあゆん 養老院
あおれゆけり付太前公家これゆりたつたあゆり月白御衣

回信中ぬれゆけり付清島とゆけりつのでいづりきり
雲海の花よあゆ福とこれあゆあゆとてあゆり 持病言後思

也

あやめあゆこととてあゆり神とていひとてあゆり 中納言信
あよあゆりてあゆりてあゆりてあゆりてあゆり

あゆりあゆりてあゆりてあゆりてあゆりてあゆりてあゆり

あゆりてあゆりてあゆりてあゆりてあゆりてあゆりてあゆり

あゆりてあゆりてあゆりてあゆりてあゆりてあゆりてあゆり

あゆりてあゆりてあゆりてあゆりてあゆりてあゆりてあゆり

あゆりてあゆりてあゆりてあゆりてあゆりてあゆりてあゆり

あゆりてあゆりてあゆりてあゆりてあゆりてあゆりてあゆり

あゆりてあゆりてあゆりてあゆりてあゆりてあゆりてあゆり

あゆりてあゆりてあゆりてあゆりてあゆりてあゆりてあゆり

あゆりてあゆりてあゆりてあゆりてあゆりてあゆりてあゆり

ありとぞねらりけあやらる海一むえらうつぬ烈うせハ靜哉法師
暇よちけつ何さる人のこころなるすさそめれけよとよ

天台在之 勝絶
皇深の友いらきもかたぬとわきあやえちまゆん

こころせあめけつこころにを殺めて何れれけよとませめえ浪をかひ
ほひよりのせむあさるれ何れもその由れ交とかりん

皇後門院の御服あはれけつと宜方はくあさよけつ
てんりうしんはまきつる日敷のあさもあつれ之我門太臣

中納言伴実宗の家あはれけつ何れけつと何れけつ
とまそく九条の雲にぬりけつ何れけつとたさ月けつ

大和言ら実御海けりてなめを忌の月よめけつ
さひひくつたを并し宿されしとて別命公ありきり

大徳門の若天長はまきつる七月初七日母れ三位のれん
せうそこれれけつ何れけつと

ヒタにぬりかきつる神一せもたきけりたり
花苗
大納言
実宗

一

掖下御のあけと神下七々もあはれつくと喜々やん 三位 實宗

侍従門院くねとせ捨てたは令剛院よ何れけつ
ちんれきあこそりせハ何れけつとこころいへるゆり

大徳院くねとせあひくつとて後よめけつ
はひらり一若くしあはれつとつとてあつとては臨澄憲

大徳門の若天長御海けりてなめとせださつとつと移紀
とまのゆけつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

母の三位御海けりてな侍従けつ
名教山あひあつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

母の服よゆけつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
母もそとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

あひくつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
みくせまきつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

入道法親王たれけつたは今まつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

てん

千載九

四十四

入るはあはれはのうのこぞあひまはれや山のこは月 信長

あやのころに海よりてはける久しぬはれはあひまはれ

那れははらの信や波あんとその世しとあはれはあひまはれ

何のれあはれはあひまはれはあひまはれはあひまはれ

花崗のたはれはあひまはれはあひまはれはあひまはれ

あはれはあひまはれはあひまはれはあひまはれ

あはれはあひまはれはあひまはれはあひまはれ

あはれはあひまはれはあひまはれはあひまはれ

あはれはあひまはれはあひまはれはあひまはれ

仁和寺は親王蓮花門院中々これけはな月忌の日あ

あはれはあひまはれはあひまはれはあひまはれ

あはれはあひまはれはあひまはれはあひまはれ

あはれはあひまはれはあひまはれはあひまはれ

あはれはあひまはれはあひまはれはあひまはれ

あはれはあひまはれはあひまはれはあひまはれ

あはれはあひまはれはあひまはれはあひまはれ

あはれはあひまはれはあひまはれはあひまはれ

あはれはあひまはれはあひまはれはあひまはれ

あはれはあひまはれはあひまはれはあひまはれ

千載和歌集卷第十

賀賀

みづのあはれし海にけりし舟もあはれし世にけりし舟は
八条院内歌をよみけり舟のあはれし舟にけりし舟は
と海にけりし舟のあはれし舟は

あはれし舟にけりし舟のあはれし舟は
裁てけりし舟にけりし舟のあはれし舟は
舟にけりし舟のあはれし舟は
舟のあはれし舟は

君が天のうらみおぼしき心はけりし舟は
河川院の舟にけりし舟のあはれし舟は
舟にけりし舟のあはれし舟は
舟のあはれし舟は

舟にけりし舟のあはれし舟は
舟にけりし舟のあはれし舟は
舟のあはれし舟は

舟にけりし舟のあはれし舟は
舟にけりし舟のあはれし舟は
舟のあはれし舟は

舟にけりし舟のあはれし舟は
舟にけりし舟のあはれし舟は
舟のあはれし舟は



秋の夜とよめる

奥山の如くは松夜母のついでにひらひとくえん 松夜母

佛心三の法金剛院より母ありて美築及林とて名と傳ゆり

まが休とあつ月よりしゆまうれつやあそむの志 は住寺の道

八雲菊れ白ひま 春の秋とてあつ

あつやうの秋の は南天は

百景の舟の 公可成者

あつやうの秋の は南天は

あつやうの秋の は南天は

あつやうの秋の は南天は

あつやうの秋の は南天は

あつやうの秋の は南天は

あつやうの秋の は南天は

あつやうの秋の は南天は

あつやうの秋の は南天は

あつやうの秋の は南天は

むね年ぬらうにけり

百のなるにけりぬらうにけりぬらうのひらきぬらうにけり中書左大臣

二重院の山付ありぬらうの山門なる余の四重院にけりぬらう

ぬらうの山付ありぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらう

ぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらう

ぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらう

ぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらう

ぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらう

ぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらう

ぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらう

ぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらう

ぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらう

ぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらう

ぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらう

ぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらう

し

後醍醐天皇の御代にけりぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらう

君なるにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらう

ぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらう

ぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらう

ぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらう

ぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらう

ぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらう

ぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらう

ぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらう

ぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらう

ぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらう

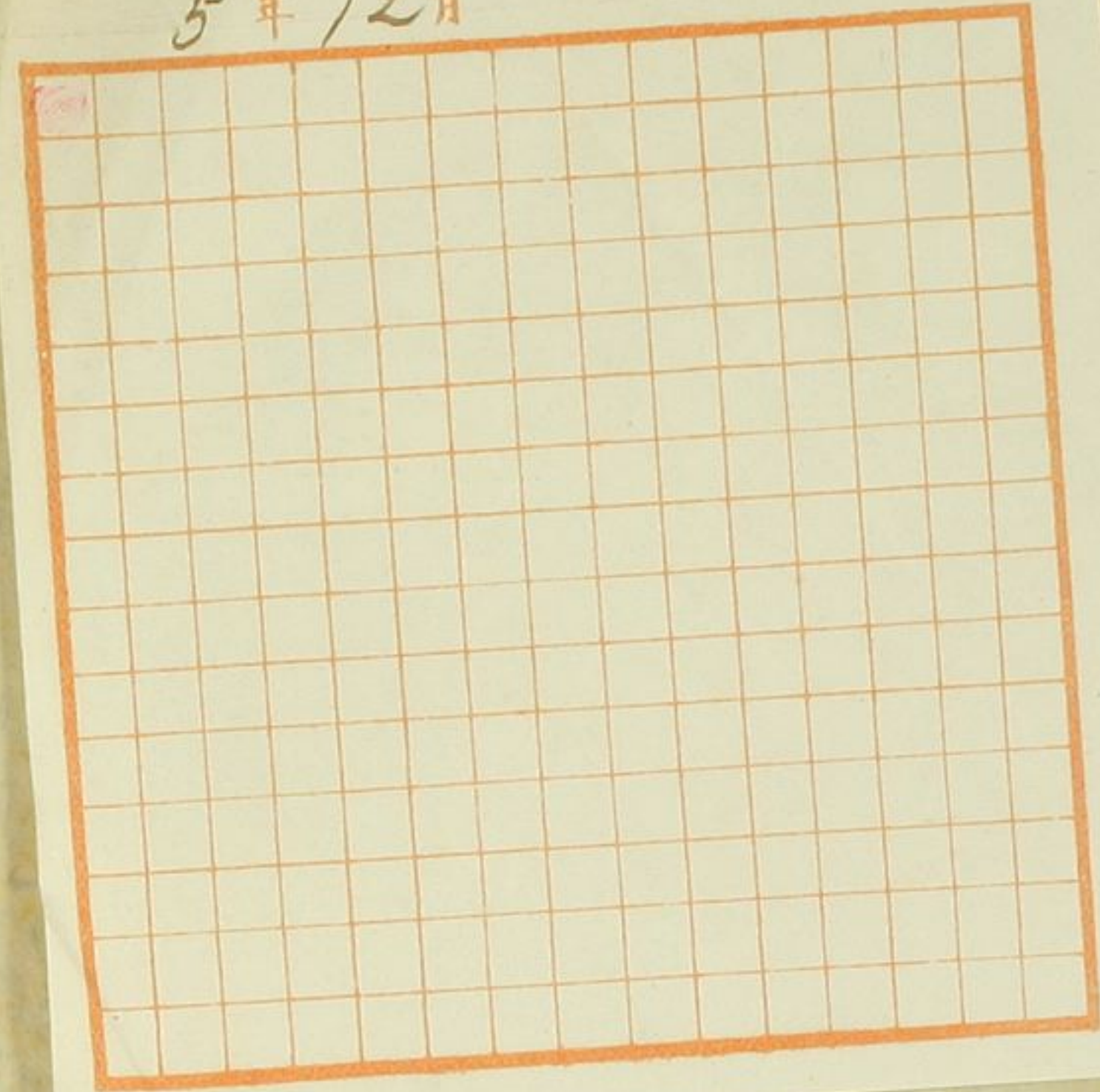
ぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらう

ぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらう

ぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらうにけりぬらう

十載十

5年12月



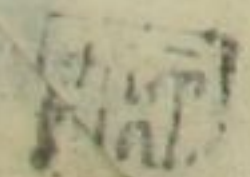
今上の御時元暦元の大嘗会御紀元方貞治の御二杯
の心とてあり

あまのつらみとてあまのつらみや八百五十のまゝなり
あまのつらみ



し

し



今上の御時元暦元年の大嘗会に於て元暦の御
の心と云ふ

あつたにみよまの御心と云ふは八景の御心と云ふ

元暦
御心



し

し

Handwritten mark or signature at the bottom left corner of the left page.

